

子宮がん検診(神奈川方式)

動 向

神奈川方式による子宮がん検診は、昭和44年より神奈川県産科婦人科医会との協力事業として、県下の医会会員医療機関から郵便により送付されてくる細胞、組織材料について検鏡・判定を行い、その結果を医療機関に返送しているシステムである。通常日母方式と呼ばれている。

前頁の車検診が行政主導で行われているのに対して、神奈川方式は産科婦人科医会会員主導で行われており、両者相補って本県の子宮がん検診の骨格をなすものである。

頸部検診において、検査数（前年比－559）、受診者数（－408）とも減少しており、今後検査数、受診者数の拡大が課題である。

精度管理については、当該医療機関の協力により、精密検査対象者についての追跡調査が当協会の情報処理部により行われ、県産科婦人科医会のご協力により年一回の報告会を開催している。

方 法

神奈川方式子宮がん検診は日母設立20周年記念事業としてスタートした。従って実施方法については昭和53年に日母がん対策委員会がまとめた子宮がん検診の標準化（日母方式）への答申によっている。従って対象婦人の年齢は一応30歳以上としながら既婚婦人ではその限りではない。がん検診のみを目的として受診した婦人についても通常の婦人科的診察を行うこと、コルポスコプを初回から細胞診と併用して使用することが奨められている。採取器具も最近では綿棒に代わってサイトピックが採用されている。

体がん検診は頸がん検診受診者の内、年齢50歳以上のもの、閉経以後のもので問診で不正出血を訴えたことのあるものを中心に内膜細胞診を行っているが、細胞採取法はエンドサイト法、吸引法、ブラシ法などが用いられていて統一性はない。

子宮頸がん検診

平成15年度の子宮頸がん検診受診者は26,504名（前年度26,912名）で減少した。

がん確定者は58名（発見率0.22%）、内訳は頸がん53名、体がん2名、その他のがん3名であった。その他のがん3名の内訳は、体がん再発1名、直腸がん子宮浸潤1名、平滑筋肉腫1名であった。

年齢階級別頸がん確定数では、29歳以下4名、30歳代14名、40歳代12名、50歳代7名、60歳代10名、70歳代6名であった。30歳代以下と40歳代以上の比較では30歳代以下の受診者数が10,184名（総数の38.4%）、がん確定数18名（発見率0.18%）に対して、40歳代以上の受診者数16,320名（総数の61.6%）、がん確定数35名（発見率0.21%）であった。病期別的には30歳代以下で発見された頸がん18例中、0期16例、I b期以上2例で早期がん中心であるのに対し、40歳代以上では35例中、0期18例、I b期以上13例、病期不詳2例、腺がん2例で高齢代に進行がんの多い傾向は変わらなかった。

頸部腺がんは増加傾向が示唆されているが今年も2例のみであった。

異形成については、確定者数146名（発見率0.55%）、内訳は軽度異形成95名、中等度33名、高度18名、腺異形成0名。年齢階層別ではやはり30歳代以下が78名（発見率0.77%）で40歳以上64名（発見率0.39%）に較べて高率であった。

子宮体がん検診

平成15年度の体がん検診受診者は7,760名（前年度7,487名）、頸がん検診受診者の29.3%（前年度27.8%）であった。

がん確定者は23名（発見率0.30%）。内訳は子宮体がん21名、内膜がん肉腫2名であった。その他に内膜増殖症25名が検出された。発見された体がんの内0期とI期が15名で65%が早期がんであった。

関係の集計表は84頁に掲載